ワークショップ

「Idealism としての近代哲学」

司会: 安部浩（京都大学）

「Idealism としての近代哲学」という総合論題が示す通り、本企画は、「idealism」（以下、本表記を「観念説」と「観念論」の総称として用いる）の観点から、主として近代哲学の動向の究明を試みるワークショップの開催を提案するものである。以下、その趣旨を説明させて頂くことにする。

元来は「見られたものの形姿」の意である「イデア」の概念を以て、感覚ならざる思惟によって初めて捉えられうる「まさに X であるものそれ自体」、乃至は肉眼ではなく心眼を通して洞見されるものを指す、喫驚に値する見解をプラトンが唱道してから此方、西洋哲学の歴史は一面において、この概念に対するその時々の（これまた驚くべき）大胆不敵な転釈による時代変遷の過程であり続けたと断じても過言ではあるまい。その証左としては、神による万物の創造という基督教の教義を巡る議論の中に「イデア」（或いは「形相(forma)」）を導入した中世哲学が筆頭に挙げられるべきであるが、これを更に人間の精神、或いは主観の中に位置づけ直すことを企図した近代哲学もまたそれに勝るとも劣らぬ好例である。

プラトン以来の前史を無論念頭に置きつつも、本ワークショップは専らこの近代哲学の時代を取り上げ、その時期における文字通り「劃期的」な「イデア」の改釈の三事例に関する報告を参会者各位に提供する。以て啻に近代哲学のそれのみならず、その歴史全体をも突き動かし続けてきたと思しき西洋哲学の根本動向（の一端）を見定めるべく、全員で談論風発の一時を共有しあうことが叶えば、欣快これに過ぐるものはない。

デカルトの観念説——自然学的観点から

松枝　啓至（京都大学）

近世・近代を代表する哲学者の一人であるデカルトの場合、簡潔に言えば、私たちの精神・心が認識し捉えるもの・内容が「観念（イデア、idea）」と呼ばれる。つまり「観念」とは、私たち人間の心・精神・意識の内において現れるさまざまなもの・ことであり、したがってこの時代において「観念」なるものは、私たちは何をどのような仕方で認識するのか、ということを論じる認識論の中核を成すと言えるだろう。

このような「観念」理論は、私見によればデカルトの形而上学を構築していく上での重要な手法である「方法的懐疑」においても積極的な役割を果たしている。また新たな自然学の構築、特にこの当時の最先端の理論である粒子仮説の構築において、その認識論的な面に関しては、この「観念」理論が欠かせないものであるだろう。

本発表ではまずデカルトの自然学と形而上学のそれぞれの文脈における「観念」がいかなるものかを簡潔に紹介し、その上で上記の二点について論じていきたい。とりわけ、そのような「観念」理論が新たな自然学の構築においてどのような役割を果たすのかを明示したい。つまり本発表では、デカルトの観念説を自然学的な観点で考察していくことになろう。

ただデカルトの「観念」理論がいくつかの難点をはらんでいることも周知の通りで、そのような困難が、のちの哲学者たちがそれぞれの「観念説」や「観念論」を展開していく契機となっているのも事実である。したがって本発表では最後にそのようなデカルトの観念説の難点をいくつか指摘した上で、その可能性についても言及した。

バークリの観念論と実在論――『心の中』の理解をめぐって

戸田剛文（京都大学）

20 世紀中頃に盛んに行われたバークリ哲学に関する議論として、バークリは主観的観念論者なのか実在論者なのかというものがあった。それは、バークリ哲学が心の外にある物質的世界を否定することによって、「心の中」という言葉の捉え方も変えるべきではないかという問題を軸に行われた。バークリを常識的な実在論と捉えるべきだという立場によれば、心の外の世界が消去される以上、「心の中に」という言葉もまたその意味を変え、「心の外」があるときとは違って領域的な意味がなくなる。そして対象との直接的な知覚的関係を表すだけの言葉となとこの立場をとる人々は言うのである。この問題について、バークリの観念論の形成の過程を確認しながら、バークリ哲学における観念論的側面と実在論的側面を再確認する。また、あらかじめロックなどの観念説を土台として議論を展開しているように見える『人知原理論』と、常識的な立場から観念論的な議論を展開する『ハイラスとフィロナスの三つの対話』における観念論形成の過程の違いを確認しながら、それによって、対象の主観性と客観性、そして世界の私的領域と公的領域がバークリの中でどのように位置づけられるか、あるいはその位置づけの難しさを指摘する。さらに研究者たちによって「マスターアーギュメント」と呼ばれる観念論のためのもっとも極端な議論であると考えられるものをとりあげて、その議論が持つ可能性、そして主観性を強めすぎる哲学的な立場に対する疑問を提示したい。

「観念論」と「形而上学」――ハイデガーの存在史的思索

松本啓二朗（大阪教育大学）

本発表では、ハイデガーの存在史的思索を手がかりにして、「観念（idea）」という事柄が、近代哲学だけでなく、古代ギリシアに始まる西洋の「形而上学」の歴史全体におよぶ射程をもったものだということを示す。そのうえで、そのようなハイデガーの思索に潜む問題を考察してみたい。

近代の学の礎を築いたデカルト哲学の根底に、ハイデガーは、「表象（前に立てること）」の働き――これは「観念」と密接に結びつくものである――を見る。そして、その「表象」においては表象する「主観」もいっしょに表象されており、「主観」と「像としての世界」という「近代の学」の基本構図がデカルトにおいて成立する、とハイデガーは言う。

また、ハイデガーは、そうした「近代の学」の原初をプラトンの「イデア」論のうちに認め、それを「形而上学」と名指す。「形而上学」とは、存在するものを全体的に問い、その存在者性を「根拠」として把握するような思索である。ハイデガーによれば、「観念（イデア）論」は「形而上学」と本質的に同じものなのである。

ハイデガーはさらに、そのような「形而上学」の完成形態を、「ゲシュテル」という現代技術の本質に見出す。近代の学において「表象・観念」を「前に立てる」とされた「立てること」の働きが、ここでは「立てること」の集合としての「ゲシュテル」という全体的な働きになっている。

このように、「立てること」と結びついた「観念」という事柄が、ハイデガーの存在史的思索においては、極めて重要な契機となっている。だが、西洋哲学全体に対するハイデガーのそのような歴史理解は、新たな仕方で「大きな物語」を語ることになってはいないだろうか。この問題も合わせて考えてみたい。